

臨地実習前の看護学生の医療安全に対する認識と安全教育への課題と対策

柘野 浩子*

新見公立大学看護学部

(2016年11月30日受理)

本研究の目的は、臨地実習前の看護学生の医療安全に対する認識を明らかにし、安全教育の課題とその対策を検討することである。臨地実習ガイダンスを終了した、実習開始前のA大学看護学部3年次生63人を対象に、無記名自己記入式質問紙調査を行い、単純集計及び内容分析を行った。その結果、課題と対策として、1. 実習前に「転倒・転落」に潜む危険を具体的にイメージできるガイダンスの実施、2. 事前学習・技術練習の確認、3. 実習第1週目に十分かわる、4. ヒヤリハット体験の振り返りと共有できる学習支援、5. 臨地実習場の環境調整、6. 看護計画における危険予測と回避の指導、7. 全体でのヒヤリハット傾向の把握と対策の検討が明らかになった。

(キーワード) 看護学生, 医療安全, 安全教育

はじめに

社会の医療安全への関心と要望の高まりに伴い、看護基礎教育において安全で質の高い看護が提供できる人材の育成が求められている。そして、各教育機関において、事故防止に対する教育方法の検討や医療安全プログラムの検討、その成果など医療安全教育に関する報告が多数なされている^{1)~3)}。

A大学看護学部では、1年次より看護学概論、基礎看護技術、その他のあらゆる科目の中で、患者の安全を守ることの重要性和その看護を考えるように教授している状況にある。また、『医療安全』（15時間、1単位、必須）は3年次前期での履修科目として設定されている。そしてA大学看護学部では3年次後期より各領域別実習が開始となるが、その直前に全体としての実習ガイダンスを展開しており、この中で、医療安全に関して感染管理認定看護師によるミニ講義も実施している。しかし、臨地実習前の学生の医療安全に対する認識や事故予防に対する取り組みについては明確でなく、実施している医療安全に関する教育が適切であるかはよくわかっていない。そこで、学生の医療安全に対する認識を明らかにし、安全教育の課題とその対策を検討する。

Ⅰ. 目的

臨地実習前の看護学生の医療安全に対する認識を明らかにし、安全教育の課題と対策を検討する。

Ⅱ. 用語の定義

インシデント：思いがけない偶発事象でこれに対して適切な処理が行われないと事故となる可能性のある事象をさす。現場ではこれを「ヒヤリハット」と表現することもある⁴⁾。

アクシデント：インシデントに気づかなかつたり、適切な処理が行われなかつたりすることにより傷害が発生し事故となる。ここで取り扱う事故とは、患者だけでなく、来院者、職員に傷害が発生した場合を含む⁵⁾。

医療事故：医療従事者が行う業務上の事故のうち、過失が存在するものと不可抗力によるものの両方を含めたもの⁶⁾。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査対象

臨地実習ガイダンスを終了した、実習開始前のA大学看護学部3年次生63人。

2. 調査期間

平成26年9月12日～9月19日。

3. 調査方法

臨地実習ガイダンス終了時に、無記名自己記入式質問紙による調査を留め置き法にて実施した。

4. 調査内容

①医療事故に関する用語の理解、②実習中のヒヤリハットや事故への不安、③ヒヤリハットや事故を起こさないための準備、④自信がある技術、⑤不安な技術、⑥ヒヤリハ

*連絡先：柘野浩子 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

ット報告書に対する考えについて。回答方法は、①は選択、②～⑥は有無及び自由記述とした。

5. 分析方法

選択と有無に関するものは単純集計し、自由記述については内容分析を行った。

6. 倫理的配慮

質問紙配布時に、調査への協力は自由意志に基づくこと、無記名であり個人を特定できないため提出後は協力の撤回ができないこと、データは研究目的以外に使用しないこと、協力の拒否により不利益は生じないことを文書と口頭で説明し、回答の提出をもって同意が得られたとみなした。A大学倫理審査会（審査番号91号）の許可を得た。

IV. 結果

調査対象63人のうち回収は54人（回収率86%）で、選択と有無に関する回答に欠損のない54人を分析対象とした。また、この対象は、2年次の基礎看護学実習Ⅱにおいて、受け持ち患者の75%に患者の移乗・移送、歩行介助等の援助を体験していた。

1. 医療事故に関する用語の理解

「ヒヤリハット」「インシデント」「アクシデント」「医療事故」のうち、「インシデント」と「アクシデント」の意味を13%の学生が理解していなかった。

2. 実習中の医療事故への不安

実習中にヒヤリハットを起こさないか不安がある学生は91%であった。不安の内容（複数回答可）は①転倒・転落が37%で最も多かった。次いで、②食事介助（誤嚥）7%、②カテーテル管理7%、②予測がつかない不安7%、⑤うっかりミス6%であった。

3. 不安な技術と自信がある技術

ヒヤリハットや事故に関して不安な技術は、非常に不安、少し不安な技術を合わせて、91%の学生にあった。その内容（複数回答可）は、非常に不安な技術は、①移乗・移送24%、②清潔の援助19%、③カテーテル管理13%、④吸引17%、⑤陰部洗浄6%であり、少し不安な技術は、①移乗・移送22%、②清潔の援助20%、③おむつ交換4%、④食事介助4%、⑤全て4%であった。「移乗・移送」、「清潔の援助」については、不安の強い技術であると捉えていた。

自信のある技術は、自信をもって行える技術、なんとか行える技術を合わせると（複数回答可）、80%の学生があると答えた。自信がある技術は、①清潔の援助15%、②バイタルサイン測定7%、③移乗・移送6%、④リネン交換6%、⑤食事介助4%で、何とか行える技術は、①清潔の援助26%、②移乗・移送17%、③陰部洗浄17%、④バイタルサイン測定11%、⑤おむつ交換4%であった。

不安な技術と自信をもって行える技術の上位は、「移

乗・移送」、「清潔の援助」でどちらも同じであった。

4. ヒヤリハットや事故を起こさないための準備

準備をしていた学生は45%で、その内容は、①技術練習22%、②事前学習19%、③イメージトレーニング6%、④基礎Ⅱの振り返り2%、⑤考えられる危険の書きだし2%であった。準備をしなかった学生は35%おり、その理由は、①その領域実習の直前に準備を行う19%、②何をしたらいいかわからない4%、③余裕がない2%であった。

5. ヒヤリハット報告書について

ヒヤリハット報告書を書きたくない学生は41%おり、その理由（複数回答可）は、①事故を起こしたくない26%、②書くことで不安になる・トラウマになりそう4%、③もっと意識してしまいそう2%、④自分に自信がなくなる2%、⑤大変そう2%であった。

一方、ヒヤリハット報告書が必要だと思うかの質問には、全員が必要だと思っており、その意義は理解できていた。

V. 考察

1. 医療事故に関する用語の意味理解

「ヒヤリハット」「インシデント」「アクシデント」「医療事故」のことばの意味について

て、全てを理解している学生は87%、理解していないことばがある学生は13%で、「インシデント」11%、「アクシデント」2%であった。学生は、医療安全の授業（15時間 1単位）を3年次前期に終了しており、さらに実習ガイダンスにおいても医療安全に関する内容が含まれていたことを考慮すると、この結果からは、授業方法や内容に課題があったことが示唆されたものと考ええる。

医療事故用語の理解は、医療者間での共通認識をはかるツールとして理解しておく必要がある。また、安全な看護を提供するために、看護学生として用語を理解することが医療事故予防の第一歩になると考えられる。そこで、医療安全の授業の中で実施している、グループワークでのヒヤリハットが起こり得る場面を用いたリスクトレーニングを、実習ガイダンスの中で再度行うことや、医療用語の理解についての再教授を含めた確認をするなどの必要性があると考ええる。

2. 実習中にヒヤリハットを起こさないかの不安

ヒヤリハットを起こさないか不安がある学生が85%おり、その不安の内容は「転倒・転落」が最も多かった。「転倒・転落」は、患者の移乗や移送、歩行介助に関連して発生することが多く、「移乗・移送」は学生が実習中に受け持つ患者の援助においても経験する機会が多い看護技術である。本調査対象の学生も、2年次の基礎看護学実習Ⅱにおいて、受け持ち患者の75%に患者の移乗・移送、歩行介

助等の援助を体験しており、「転倒・転落」については具体的にイメージができる事故として不安を抱いたものと考えられる。「転倒・転落」がヒヤリハットの発生頻度の上位に挙がることは山下らも報告している⁷⁾。近年、KYT（危険予知トレーニング）の有効性が明かにされている^{8)・9)}ことから、実習直前に、実習で学生が受け持つ患者を想定して、麻痺や言語障害がある患者の日常生活場面を取り上げたKYTによる転倒・転落に潜む危険を具体的にイメージできる実習ガイダンスの実施が有効であると考ええる。また実習前に、各実習領域において、学生の事故を想定したオリエンテーションを行うことも臨地の現実感を高め、事故防止に対する意識づけになる¹⁰⁾との報告もあり、各領域の実習を終了した先輩学生たちが実際に体験した事故事例を用いて医療安全のオリエンテーションを行うことも、さらに臨場感が増し有効であると考ええる。

また本調査では、不安な技術として「移乗・移送」を挙げた学生が最も多かった。このことをふまえ、「移乗・移送」は転倒・転落事故の直接的原因となる技術であるため、実習直前に前述したように患者設定をした上での移乗・移送演習も有効であると考ええる。

実習開始当初は、学生は病棟にもその実習にも慣れておらず、特に「予測がつかない不安」が強いことが予測される。臨地実習におけるヒヤリハット報告が、実習開始2～5日に最も多いとの報告がある¹¹⁾ことから、特に実習の第1週目は学生に十分に関わることが大切であると考ええる。また、ヒヤリハット体験を振り返り、その体験を共有できる学習支援が、予測がつかない漠然とした不安の軽減につながると考える。これには、看護学科全体としてのシステム作りが必要になる。また、実習指導者と教員がコミュニケーションをとり、連絡・相談をし、連携をとることが重要である。学生が安心して実習ができるためにも、臨地実習上の環境調整は大切であると同時に我々教員の役割でもあると考ええる。

3. 不安な技術と自信がある技術

本調査の結果で、非常に不安・少し不安のどちらにおいても「移乗・移送」が最も多かった。「移乗・移送」については、看護学生の实習中のヒヤリハットやインシデント体験調査においても常に発生頻度が高い項目として報告されている^{12)・13)}。今後の実習においても移乗・移送の援助場面が多いことが予測されるが、その対策については、前述した通りである。

次いで多かった不安な技術は「清潔の援助」であった。これには、受持ち患者の個別性の把握とそれに対応する看護計画における危険予測と回避を盛り込んだ計画の立案を指導することが必要である。さらに、学生と一緒に実施をすること、その後の援助の振り返りを行うことが対策になると考える。

本調査において、不安な技術と自信がある技術の上位が同じであったことは興味深い結果であった。これは、学生が臨地実習において実施する技術は生活の援助技術が多いことによるものと考えられ、中でも、車いすへの移乗・移送、歩行介助などの「移乗・移送」、全身清拭、足浴、洗髪等の「清潔の援助」が多いものと思われる。そのため、基礎看護学実習Ⅱにおいてうまくいったという成功体験がある学生や、事前学習として演習を十分重ねた学生は自信をもって行えると答えたのではないかと推察する。一方、経験の中でうまくいかなかった体験、受け持つ患者によっては留意点や方法の工夫が必要になる点に対応できるか不安を感じることから、自信がないと回答したとも考えられる。これらに関しても、事前学習を基に、個別性をふまえた計画・実施・評価ができるよう指導することが必要である。

4. 学生が行ったヒヤリハットや事故を起こさないための準備

54%の学生が、ヒヤリハットや事故を起こさないために技術練習、事前学習に取り組んでいた。技術練習は、実際の援助時の必要物品、手順、留意点等の確認になり、事故の予防につながる。そして、実際に行くことで自信につながる。本調査で明らかになった医療事故に対する不安を考慮すると、より効果的な方法として、考察2で述べた、実習で学生が受け持つ患者を想定しての麻痺や言語障害がある患者の日常生活場面を取り上げた机上でのKYTの事例について、患者役・看護師役・観察者を設定して演習に取り組むこと、教員が演習状況を確認することもよいと考える。

また、数人の学生は、イメージトレーニングや基礎看護学実習Ⅱの振り返りをしている学生もいた。振り返りについては、風岡らが、「一つひとつの事例に対し、教員がサポートしながら振り返りを行うことで、学生はその発生過程を追体験しながら、自らの行動パターンに気づき、危険性を意識して援助することができるようになる」¹⁴⁾と述べている。風岡らが述べているような、学生と向き合っている丁寧な振り返りの積み重ねができるよう教員が関わる必要がある。

約半数の学生が実習ガイダンス終了時において事前学習が十分でなかったことは憂慮すべき点である。技術だけでなく、提示された事前学習に取り組み、実習に関連する知識の復習や確認が事故予防には重要である。また、実習直前に課題に取り掛かっていても時間が十分でない場合が多く、実習で活用できる学習に結び付くことは期待できないと考えられる。そのため、事前学習が事故予防にもつながっていないことが懸念される。この現実と、「直前にする」、「何をしたいかわからない」等の回答があったことから、事前学習の意義を事故予防も含めてしっかり伝

るようにガイダンスを行う必要があることが示唆された。

5. ヒヤリハット報告書

ヒヤリハット報告書の意義については全員が理解していたが、その上で書きたくないと回答した学生が41%おり、「事故を起こしたくない」との理由が多かった。「書くことで不安になる・トラウマになりそう」と4%の学生が回答していたが、ヒヤリハット報告書を書くことに対してマイナスのイメージをもっている学生がいるのではないかと推察する。学生は振り返りを通して、患者に及ぼす影響を具体的に理解することになる¹⁵⁾。ヒヤリハット報告書を書くことがリスク感性の向上につながり、事故予防の視点形成に役立つことを伝えているが十分理解できていない状況が明らかになった。報告書の目的を理解できるよう伝えることを前提に、事故を予防すること、安全な看護を提供することについて、学生個々が、医療安全の授業・実習ガイダンスの中でしっかり考えられるよう取り組むことが必要である。

謝辞

本研究にご協力いただいた学生の皆さまに深く感謝いたします。

文献

- 1) 日下知子, 松本明美, 沖田聖枝: 看護学実習におけるインシデント・アクシデント調査報告－事故防止に対する教育方法の検討－, 川崎医療短期大学紀要, 27, 7-12, 2007.
- 2) 真島久美子: 医療事故模擬体験と臨地実習を包含した包括的な医療安全教育プログラムの検討, 第45回日本看護学会論文集看護教育, 15-18, 2015.
- 3) 宮崎伊久子, 永松いずみ, 原田千鶴, 他3名: 反復的な危険予知トレーニング (KYT) で実施する医療安全教育プログラムの成果－学生の自己評価の分析より－, 第43回日本看護学会論文集看護教育, 58-61, 2013.
- 4) 日本看護協会: 特集 組織で取りくむ医療事故防止 看護管理のためのリスクマネジメントガイドライン, 看護51 (12), 29-57, 1999.
- 5) 前掲4), 29-57.
- 6) 日本看護協会: 看護職の社会経済福祉に関する指針 医療事故編, 東京, 日本看護協会出版会, 82, 1999.
- 7) 山下百合子, 宮川朋子, 百合淳子, 他2名: 看護学生の起こすヒヤリハット体験の発生状況の分析と指導, 第38回日本看護学会論文集看護教育, 51-53, 2007.
- 8) 石川雅彦: 医療安全トレーニングのコンピテンシーと今後の展開KYTからCMR, LOFTへ, 看護管理, 16 (3), 186-188, 2006.
- 9) 兵藤好美: 看護学生のヒヤリ・ハット傾向と危険予知トレーニングの実践, 看護展望, 32 (2), 9-96, 2007.
- 10) 前掲1)
- 11) 川原田榮子, 大屋演子, 竹下美恵子: 看護基礎教育の臨地実習における電子化カルテ活用状況に関する実態調査, 日本看護論文集看護管理, 39, 366, 2008.
- 12) 風岡たま代, 西堀好恵, 坂田五月: 成人看護急性期実習での看護学生のヒヤリハット体験－病棟の指導体制との関係－, 日本看護研究学会雑誌, 29 (3), 2009
- 13) 安藤悦子, 郡司理恵子, 岡田純也, 他3名: 成人看護学実習におけるヒヤリ・ハット体験に関する実態調査, 長崎大学保健学研究, 65-74, 2007.
- 14) 前掲1), 12.
- 15) 山崎純子, 花田未希子, 森下千鶴, 他3名: 臨地実習におけるヒヤリハット体験の学生の意識調査, 勤医協札幌看護専門学校紀要, 2, 21-23, 2009.